

◇ 木野雅之 (ヴァイオリン) Masayuki Kino, Violin

桐朋学園を経て、1982年ロンドンのギルドホール音楽院に学び、名匠イブラ・ニーマン教授に師事する。音楽院卒業後、ナタン・ミルシュタイン、ルッジェーロ・リッチ、イヴリー・ギトリス等3人の巨匠に師事し研鑽を積む。

1983年、イタリアにてロドルフォ・リビツァー国際ヴァイオリン・コンクール優勝。84年、ロンドンにてカール・フレッシュ国際ヴァイオリン・コンクール最高位を獲得し、W.H.スミス賞と聴衆賞を受賞。85年、パリにてメニューイン国際コンクールでサロン音楽特別賞を受賞。87年には『ロイヤルオーケストラ協会シルバーメダル』を授与され、ロンドン 記念演奏会を行った。88年、ベルリンにてルッジェーロ・リッチ国際マスター・コンクール優勝。90年にはアメリカのパーム・ビーチ招待国際ヴァイオリン・コンクールに優勝。

ソリストとしてロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団、ベルリン交響楽団、ポーランド国立放送交響楽団、モスクワ放送交響楽団、ロンドン・モーツァルト管弦楽団等と共演。また、サンレモ、オールドバラなど国際音楽祭への参加も多く、海外での活躍も盛んに行われている。

名古屋フィルハーモニー交響楽団のコンサート マスターを経て、93年4月より日本フィルハーモニー交響楽団のコンサート マスターに、02年7月よりソロ・コンサート マスターに就任。

多数のCD、DVDがオクタヴィア、サウンド&ミュージッククリエーション他より発売されており、いずれも高い評価を得ている。

世界各地でのマスタークラスを始め、東京音楽大学教授、桐朋学園大学、武蔵野音楽大学講師として後進の指導にあたっている。JASTA(一般社団法人日本弦楽指導者協会)理事。

使用楽器は恩師ルッジェーロ・リッチから譲り受けた1776年製ロレンツォ・ストリオーニ。

《木野雅之のオフィシャルサイト》

<http://eknowhowinc.juno.weblife.me/masakino2/index.html>

◇ 藤本史子 (ピアノ) Fumiko Fujimoto, Piano

九州女学院高校(現ルーテル学院)を卒業後、国立音楽大学ピアノ科卒業。ピアノを、吉川由三子、小池和子、上田晴子、アドリアン・コックスの各氏に師事。

これまでに、幾多の音楽コンクールで入賞し、2008年、国際ピアノ伴奏コンクール優勝。2009年、日本ピアノ歌曲伴奏コンクール優勝。

NHK交響楽団、九州交響楽団をはじめとするプロオーケストラメンバーや、国内外の著名な演奏家、声楽家と全国各地で共演を重ねている。

ヴァイオリニスト木野雅之氏や、コントラバス奏者深澤功氏とのCD、DVDもリリース中。

又、ラズモフスキー四重奏団や東京ベーターヴェンカルテット、KMA等との共演やスコットランドDG地球救援音楽祭、球磨川音楽祭、みおつくし音楽祭、八女おりなす音楽祭等にも出演。

現在、東京と九州を拠点に、様々なジャンルのコンサートを企画、出演し、いずれも高い評価を得ている。

《藤本史子オフィシャルサイト》

<http://www.fujimotofumiko.com>

◆ プログラム・ノート

若き日の歌曲をヴァイオリン用に編曲した佳品!

■ ストラヴィンスキー(ドゥシュキン編曲): 田園



この曲の原曲は、ストラヴィンスキー(1882-1971)25歳の時、1907年にロシアで作曲された歌曲で、恩師リムスキー=コルサコフの夫人に献呈されました。ストラヴィンスキーは、その後、この歌曲をヴァイオリン奏者ドゥシュキンと協力して「ヴァイオリンとピアノ」及び「ヴァイオリンと四つの木管楽器」の二つの版に作り直しています。ドゥシュキンはポーランド出身のアメリカのヴァイオリニストで「ヴァイオリン協奏曲」を始め、多くのストラヴィンスキーのヴァイオリン作品の作曲に手を貸し初演も行なっています。

息を呑むような美しさ! これぞまさに隠れた名曲!

■ グラナドス: ヴァイオリン・ソナタ



スペイン近代音楽を代表する作曲家グラナドス(1867-1916)は、「スペイン舞曲集」などのピアノ曲がよく知られており、室内楽の作品は余り演奏される機会がありません。しかし、この曲は聴く者を魅了して止まない美しさに溢れています。書かれたのは晩年の1910年頃、曲はヴァイオリニスト、ジャック・ティボーに献呈されたと言われています。揺れ動くヴァイオリンの音色がピアノと有機的にかみあう曲想は、フランス音楽の影響を色濃く反映しており、単一楽章の作品ですが、本来3楽章から成るソナタの第1楽章で2楽章以降は未完に終わったと言われています。

美しい陰影を湛えた旋律で魅了する珠玉の小品集!

■ チャイコフスキー: 懐かしい土地の思い出 Op. 42

1. 瞑想曲 2. スケルツォ 3. メロディ



題名の「懐かしい土地の思い出」とは、チャイコフスキー(1840-1893)がよく作曲のために滞在した、彼の支援者フォン・メック夫人の所有するウクライナ・プライロフの土地のことを指すと言われています。曲は「瞑想曲」、「スケルツォ」、「メロディ」の3曲により構成されており、1878年、ヴァイオリン協奏曲を書くために滞在していたスイスのクラランで書かれた作品です。1曲目の瞑想曲は、当初、ヴァイオリン協奏曲の第2楽章に使われる予定でした。優美なメロディに溢れたこの曲集は、組曲としても、単独曲としてもよく演奏され、後にグラスノフによる管弦楽伴奏版が出版されました。

流麗にしてロマンの香気溢れる小品!

■ シマノフスキー: ロマンズ二長調 Op. 23



現ウクライナに領地を持つポーランド貴族の家庭に生まれたシマノフスキー(1882-1937)は、ショパン以降のポーランドを代表する音楽家の一人で、その作風は、後期ドイツロマン派ふうの初期、印象主義時代の中期、民族様式確立の後期の3期に分けられます。シマノフスキーのヴァイオリン曲としては初期のソナタや「ロマンズ」、ギリシア神話に題材を求めた「神話-3つの詩」、2曲あるヴァイオリン協奏曲が知られています。いずれの作品も、当時、交流のあった同郷のヴァイオリニスト、コハンスキーの協力を得て完成されたと言われており、1912年に書かれた「ロマンズ」は、流麗にしてロマンの香気溢れる小品として愛されています。

若き日に憧れたヴァイオリンへの想いが結実した作品集!

■ シベリウス: 6つの小品 Op. 79

1. 思い出 2. メヌエットのテンポで 3. 特徴的なダンス
4. セレナード 5. 田園風舞曲 6. 子守唄



少年時代からヴァイオリンに憧れ、青年期にはヴァイオリニストになることを夢見ていたシベリウス(1865-1957)にとって、ヴァイオリンはひたすら自らの想いを託せる楽器でした。フィンランド独立の1917年前後、50歳を迎え、すでに世界的な作曲家となっていたシベリウスは、この頃、数多くのヴァイオリンのための小品を書き上げています。そこには叶わなかったヴィルトゥオーゾへの憧れが託されていたのかもしれませんが、この曲集は1815年から1918年の間に書かれ、北歐の自然や情景に寄せるシベリウスの想いが美しく表現された作品集として完成されています。

華麗なヴァイオリンの技巧が冴える熱情的な名曲!

■ ヴュータン: ファンタジア・アパッショナータ Op. 35



ヴュータン(1820-1881)は、ベルギーに生まれ6歳で演奏会デビュー、ヴィルトゥオーゾ・ヴァイオリニストとしてヨーロッパ各地で華々しく活躍しました。作曲家としても活動し、その作品はバリ音楽界のみならず、ロシアやアメリカでも絶賛されました。ファンタジア・アパッショナータ(熱情的幻想曲)は、1860年頃、ニコライ1世の宮廷音楽家としてロシア滞在中に書かれ、元はヴァイオリンと管弦楽のための作品です。アレグロ・モデラートの第1部、ラルゴの第2部、イタリアの激しい舞曲サルタレッコを模した第3部から成り、熱情的にして華麗なヴァイオリンの技巧を堪能することができます。